

文献紹介

藤田裕嗣 著

『荘園絵図が語る古代・中世』

山川出版社 2012年1月 112頁 800円＋税

本書は歴史地理学による荘園絵図読解についてまとめられたものである。日本史リブレットシリーズの一書として2009年に出版され、2012年に第二刷が出版された。

本書の構成は次の2つからなる。まず、荘園絵図の概要や歴史地理学の考え方などを整理した解説編である。そして、奈良市西大寺周辺を描く「西大寺絵図群」と呼ばれる荘園絵図を題材とする荘園絵図読解の具体例を提示した論考編である。著者による既出の研究成果をもとに、その後、新しく得られた知見を加えた内容が示されている。

本書の目次は次に示すとおりである。

①荘園絵図と歴史地理学

「荘園絵図」の概観／荘園絵図の分類／「歴史地理学」その一、景観復原／景観復原の例－大和西大寺領／「歴史地理学」その二、地理的变化／若槻における環濠集落の形成過程／荘園絵図の研究小史と本書の位置づけ

②西大寺絵図群における古代・中世

西大寺と秋篠寺／西大寺絵図群の概要と班田図／敷地図と「福益名」／敷地図1、作成時期と主題、記載内容／その他の敷地図／中世絵図など、その他

③古代の京北班田図と中世の編集

京北班田図と古代の田図／京北班田図と開田図との比較／京北班田図の主題と作成時期／現地比定に残された課題／現地比定する対象としての地名の検出／現地比定の試み／京北班田図と近代とをつなぐ中世地名／現地との対話－今後の研究課題

④中世の相論絵図に描かれた地域

相論過程と絵図1～3／第一期の相論と絵図1／第二期の相論と絵図3／絵図2の作成時期／景観の現地比定／絵図ごとの特徴／絵図の天地／文字や図像のさまざまな記載方向／絵図1の構図／絵図2と3の場合／場所相互

の位置関係から探る環境認識

荘園絵図が誘う歴史散歩

①ではまず、荘園絵図全般について説明されている。著者は、「荘園絵図」を「領域を描いた古代・中世の古地図類」とした上で、先行研究による分類にもとづきながら、絵図の種類やその内容についてふれている。さらに本書が、荘園絵図のなかで特定の地域を描いた複数の絵図が存在する西大寺絵図群（奈良市西大寺所蔵および旧所蔵含む）を対象とし、それらに盛り込まれた歴史像について解説していくことを述べている。

また本章では、具体的な事例を示し、歴史地理学の考え方について言及している。まず第1として景観復原、第2として時期の異なる同じ場所の景観復原を重ね合わせることで明らかになる地理的变化といった、従来よりなされてきた伝統的な2つの考え方を挙げている。くわえて、第3として近年の研究において進展してきた、地図を題材として当時の人びとによる地域のとらえ方を探る考え方を挙げている。そして、本書における考え方も第3の考え方の一環であると述べている。

②では、絵図群の所蔵先（旧所蔵含む）である西大寺や、西大寺の堺相論相手であり絵図にも記載されている秋篠寺の概要を説明している。また本章では、全14点ある西大寺絵図群を「班田図」（2点）、「敷地図」（4点）、「相論絵図」（3点）、「その他」（5点）に分類している。

このうち本章では、とくに「敷地図」を取り上げている。まず絵図に記載された西大寺領「福益名」の所在やそれらの変遷、これまで提示されている絵図作成時期の諸説などを整理している。そして、記載内容や描かれた図像の視座などの検討にもとづき絵図の主題などを述べている。

このほか、「その他」に分類する中世から近世期作成の西大寺境内を描いた絵図についてもふれている。そこでは、絵図の記載内容や作成過程などを説明している。

③では、筆者が「班田図」に分類する「京北班田図」の概要や図の検討結果について述べている。まず、先行研究の整理をもとに、「京北班田図」が古代（8世紀後半および9世紀初頭）の班

田図などを原図とした絵図であることを述べている。また、「京北班田図」の作成時期や主題について、14世紀における西大寺と秋篠寺の堺相論時、13世紀後半における両寺間で行われた寺領の相博（交換）時に作成されたとする諸説などを紹介している。

次に、「京北班田図」の記載地名と、中世の「相論絵図」や近世絵図そして明治期作成地籍図などの記載地名との比較検討の結果を示している。そこでは、「京北班田図」の記載地名の多くが、絵図作成時期とされる13・14世紀には残存していなかったとする見解を出している。また、これをふまえた上で、絵図の機能について言及している。このほか、図の現地比定や2点ある図の相互関係などといった残された研究課題についても指摘している。

④では、「相論絵図」を取り上げている。まず、絵図の作成背景などについて、14世紀における西大寺と秋篠寺の2度にわたる堺相論との関係のなかで説明している。

次に、著者による各絵図の詳細な読解結果を示している。そこでは、絵図作成主体である人々の地域のとらえ方を強く反映した、図像の描き方や構図の設定の存在などを指摘している。

本書の終章では、歴史地理学の醍醐味である現地踏査などについてふれている。西大寺絵図群に描かれた景観や地域の歴史性などをはじめとした説明がある。

以上、本書の内容について簡単にふれた。本書では、地名や図像そして構図などの分析にもとづき、絵図の機能の解明や当時の人々による空間認

識の抽出といった、歴史地理学ならではの研究視角が随所に盛り込まれている。絵図を読み解くことで、古代・中世の歴史像が明らかになるという荘園絵図研究の面白さが十分に伝わってくる。また、研究方法や研究史などが丹念に示されており、大変読み応えのあるものとなっている。

あえて荘園絵図読解の説明に関して付言すれば、他の荘園絵図を用いた言及がもう少し欲しかった。また、西大寺絵図群についても、写真・トレース図版や地形図などを多く提示し、より具体的な説明がなされていれば、さらにわかりやすかったのではないと思う。ただし、これらの点は評者の無いものねだりであって、本書の価値を損なうものではない。

近年、荘園絵図を含めた古地図については、歴史地理学だけではなく歴史学をはじめとした様々な分野で研究が進められている。本書は、このような研究動向のなかで、歴史地理学における独自の研究視角の一端についてまとめられたものであり、その意味でも本書出版のもつ意義は大きい。これまで、この類いの本が出版されることは無かっただけに、一般の人にとっても、また、これから古地図研究を行う人にとっても有益な一書であると思う。

最後に、本書はそで部分の説明にもあるように、西大寺周辺を歴史散歩するためのガイドも兼ねている。西大寺絵図群に描かれた景観のなかには、今もなお残っているものが少なくない。本書を携帯して、古代・中世の世界をぜひ堪能していただきたい。

（三河雅弘）